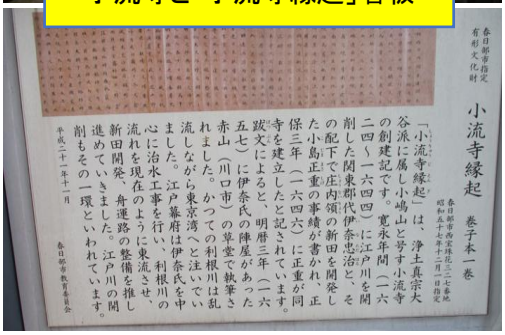
2026－2－1

47【街の散策からの気づき発見】
小流寺と小流寺縁起

会員　K.T.

小流寺と「小流寺縁起」看板



西宝珠花地区の小流寺（春日部市西宝珠花328）を訪ねた。現在の小流寺は西宝珠花にあるが、もともとは、近隣の吉妻村にあった。昭和27年(1952)江戸川改修で現在の地に移転した。寺に『小流寺縁起』が伝わっている。境内の説明看板によると、

「『小流寺縁起』は、浄土宗大谷派に属し小嶋山と号す小流寺の創建記です。寛永年間(1624～1644)に江戸川を開削した関東郡代伊奈忠治と、その配下で庄内領の新田を開発した小島正重の事績が書かれ、正保三年(1646)に正重が同寺を建立したと記されています。跋文によると、明暦三年(1657)に伊奈氏の陣屋があった赤山(川口市)の草堂で執筆されました。かつての利根川は乱流しながら東京湾へと注いでいました。江戸幕府は伊奈氏を中心に治水工事を行い、利根川の流れを現在のように東流させ、新田開発、舟運路の整備を推し進めていきました。江戸川の開削もその一環といわれています。

平成21年(2009)11月　春日部市教育委員会　　」

『小流寺縁起』は、市の指定文化財となっている。執筆者は不明だ。『何故？』、開削から10年以上も後に執筆されたのだろうか、と思う。『小流寺縁起』によれば、この地は低湿地帯で「毎年七、八月に低地に滞留した雨水に加えて諸国の河川の水が集まり、水害に悩まされた。」という。江戸川開削等で低湿地帯は水害が防がれ、一帯の新田開発が進んだ。江戸時代初期は幕府が関わった河川工事の基本文献が少ない。流域の村々の伝承に基づいた作成資料は伝わっている。これら伝承ため江戸川の開削時期には諸説ある。①寛永12年(1635)説、②寛永17年(1640)説、③寛永18年(1641)説があり、開削には3年～9年を要し、低湿地部の新田開発は並行して進められたようだ。正重は伊奈忠治の家臣で江戸川開削と新田開発に活躍した人らしい。伊奈一族は徳川幕府の土木技術集団で、徳川幕府の初期、利根川東遷・荒川西遷・江戸川開削・鬼怒川小貝川分離等、関東平野の河川を改修し、現在の関東川筋を造った。春日部市郷土資料館　夏季展示（第49回）『江戸川』平成26年(2014)7月の資料によると、「（前略）正重が歴史上の記録として初めて登場するのは、寛永8年(1631)9月21日の伊奈忠治による「川通法度証文写」（「竹橋余筆」・元栗橋松本家文書）である。当時、利根川の対岸へ渡るには(代官の)忠治の許可が必要とされていた。忠治の代わりに許可できる6人の家臣の内、1名に小島庄右衛門の名がある。その後、寛永21年(1644)7月26日（武蔵国荏原郡下蛇窪村検地帳）、同年8月（同国橘樹群下丸子村検地帳）等にも登場する。（中略）この時期、正重が伊奈代官所の手代衆の役割を果たしていたと考えられる。（中略）正重は、近世前期の幕府の農村支配を支える重要な人物であったことが伺われる。（中略）小島一族は寛政4年(1792)、伊奈氏が失脚するまで、幕領の地方支配に尽くした。（後略）」

小流寺境内に正重の墓がある。正重が生きた時代[生年不祥～寛文8年(1668)]は、徳川幕府(1603～1867)の基礎が固まっていく時代だ。米が経済の根幹で、新田開発と農村支配は重要な政策であった。伊奈一族は、関東の河川改修をし、新田開発と農村支配で重要な役割を果たしている。江戸川が開削される以前、武蔵国と下総国は、前利根川筋（現在の古利根川・古隅田川・元荒川）を境界としており、東は武蔵国太田庄、西は下総国河辺庄と呼ばれた荘園があった。下河辺庄は十二世紀頃には成立していたらしい。下総国葛飾郡の北部に位置し、利根川（現古利根川）左岸域の広大な低湿地（現春日部市・杉戸町・吉川市・三郷市）、その東側の下総台地（現千葉県野田市・松伏町）、北端は猿島台地（現茨城県古河市）が広がっていた、という。荘園の中央部には下総台地を流れる渡良瀬川水系の河川が流れていたと考えられている。粕壁宿開設は元和2年(1616)、その後の江戸川開削と新田開発で、現春日部市の主要地域ができたようだ。